

速水佑次郎・菊池真夫

### 『岐路に立つアジア農村経済』

Yujiro Hayami and Masao Kikuchi, *Asian Village Economy at the Crossroads: An Economic Approach to Institutional Change*, Univ. of Tokyo Press, 1981, xx+275 pp.

「アジアの村落経済は今や二重の意味において岐路に立っている。1つの次元において、村落共同体に多数を占める貧乏人が所得や資産の分配においてさらに貧困化するかという決定的な問題がある。もう1つの次元において、もし不平等化が進むとすれば、村落共同体の構造が階層の両極分解に向けて進むのか、農民の多層化に向けて進むのかという問題がある」(本書 p. 220)。

このような大きな問題意識に支えられながら、本書はフィリピンとインドネシアの村落の詳細な実態調査をふまえて、経済分析が制度発展に対してどのような洞察を与えるかという難問に正面から立ち向った研究である。

著者が村落(village)と呼ぶのは、アジア農村の基本的単位であって、多くの家族がかたまっ住み、高度の社会的・経済的独立性をたもった単位である。そこでの農業活動を営む際に、地主-小作関係、分益小作関係をはじめとして、生産活動と所得分配を定めるさまざまな生産関係、広い意味での契約関係が観察される。このような諸制度(institutions)——著者によれば制度とは共同体の成員によって履行が強制(sanction)されることころのルールの集りである——を経済理論で説明できるかどうかという問題提起から本書ははじまる。

すなわち、第I部の第2章においてアジアの諸制度を念頭におきながら、制度の生成発展の経済分析が体系的に紹介される。経済制度は経済合理性に従って発展していくというシカゴ学派の考え方を大筋に、制度変革のための共同行為がどのような場合に可能かといった議論を、著者は自分の考え方を交えながら極めて濃縮した形で展開する。

第3章では、アジアの農業発展のマクロ的特長が説明され、そこでの人口増加の圧力、そしてグリーン革命の名で知られる稲の新品種の導入に代表される技術進歩の役割が、簡単な生産関数と労働需給のモデルによって分析される。そして、マルクス経済学者を含めた多くの学者が説くように、新しい技術進歩は地主にのみ利益をあたえ、小作人はますます貧困化して農民の両極分解(polar-

ization)——マルクスの原始的蓄積に類似する——が進んでいくのか、それとも契約関係の複雑化にともない土地を持たない農民から不在地主までの間のスペクトル上にさまざまな階層が生ずるという形の多層化(stratification)が進んでいくのかという基本的な問題が提示される。

第II部と第III部においては、以上の基本的な問題設定にもとづいて、それぞれフィリピンとインドネシアの事例の分析が詳細に展開される。

フィリピンにおける農村の基本的性格とスペインの植民地化の影響を要約した後、著者はフィリピンの内陸部と海岸部での稲の刈入れにおける契約形態の変化に関心を集中する。

もっとも興味ある制度変化の形は、*husanan* 制から *gama* 制への変せんである。*husanan* とは、ある農家(farmer)が収穫日を指定すると、だれでも刈入れ脱穀に参加することができ、彼等は生産の一定の割合を獲得できる制度である。農家が交代するのでこの制度は一種の共同、相互雇用の関係である。ところが、人口増加圧力の結果、このような所得分配関係は保ちにくくなると、*gama* 制が導入される。*gama* とは、田の草取りに無料で働いたものだけが、刈入れや脱穀に参加できるというシステムである。このような形で、人口増加による限界生産力の低下の反映した実質賃金の低下が実現する。なぜ安い日雇いの労働をやったり、あるいは以前から決まっていた作物分配の分け前(たとえば6分の1)を減らして調整しないかといえ、お互いの共同扶助と分かち合いを原則とした村落共同体にとって *gama* 制の方が社会的摩擦をもたらすことがより少ないからであるという。このように、経済合理性が制度変革を生み、またその理由は基本的な価格理論で説明できるというのが本書の立場である。

*gama* 制度のみられる東ラグナ村では、このように契約の複雑化、階層の多層化がみられる。しかし、南ラグナ村では逆に農民の両極分解が起っている。その原因は、スペイン等の植民地支配の結果すでに不在地主による荘園(*hacienda*)が発達していたこと、共同体的な規制が弱かったこと等に求められる。そのような条件の差があるため、農民は大規模な資本家的農民と、土地を離れたプロレタリアに分解していくというのである。

第III部のインドネシアの分析も、ほぼフィリピンの分析に類似している。ただ、2つの村の比較の基準が技術進歩の有無におかれている点で異なっている。ジャワの新種の採用を行わない南 Subang 村では、人口増加は

共同刈入れ方式で分け前を受けとる bawon 制からフィリッピンでの gama 制に似た ceblokan 制の採用をもたらした。したがって農民の両極分解は起らないが、経済停滞の結果不平等はますます激化していった。これに対して新種を採用した北 Subang 村においては、bawon 制がそのまま維持された。人口増加のため労働の分配率は低下したが、技術進歩のおかげで賃金率はむしろ上昇している。著者がもっとも強調する論点は、農民の貧困化は決して一部の論者がいうように新技術の採用によるものではなく、むしろその不採用にもとづくのだということである。

私は、農業経済学にも経済発展論にも、まったくの門外漢である。したがって以上の要約が的を射ているという自信はまったくない。おそらく、制度発展の経済学に興味を持っていることから、書評の役を与えられたのだと思うが、ともかく2,3の感想を述べさせていただく。

まず、制度発展の経済分析を要約した第2章は、それだけでも一書を必要すると思われる難しい内容を簡潔にまとめている。全体としてバランスのとれた叙述であるが、多くの内容を短い紙数にまとめているので、読者は消化するのにとまどうかもしれない。経済合理性だけで制度はうごくのか、初期条件(歴史的な所与とってよいかも)がどう制度発展を規定するのか、政治的リーダーシップの役割等、多くの微妙な問題が提出されている。制度発展の問題に興味をもつ読者は、本章で挙げられている参考文献を参照しながら、そこで1パラグラフ、ときには1文で述べられていることの意味を、その是非も含めてじっくりと考えてみる価値がある。

著者に対する私の第1の質問は、たとえば「gama が採用されるのは共同体的慣行と摩擦をあまりもたないからだ」といった慣行と経済合理性の交錯を、よりつきつめるとどういうことになるのかという質問である。経済合理性は長期的にはいづれ貫徹するにしても、制度変革をもたらす触媒は何なのか。妨げる要因は何なのか。文化的、社会的、政治的要因はどう変革にかかわってくるのかという問いは制度発展の分析の基本的な問題である。

第2の質問は、「高度の独立性を保ち」(p. 11)ながらも共同体は他の共同体と交易していると思われるので、対外交易の役割、交易条件つまり相対価格との関係はどうかということである。分解した農民層にしても都市に吸収されるのか、村落に残っているのか等が必ずしも明確でない。他の共同体との交易と、共同体内での自律的な協働関係のどちらがより重要なのかは、経済史においてもしばしば議論される重大問題であると思う。

本書は内容の密度が高いので必ずしもとつきやすくはないが、極めて明晰な英語で書かれており、理論的思考が詳細で豊富な数量的資料で裏打ちされている。用いられる経済理論は、労働の限界生産力が逡減するという比較的簡単な原則に基づいているが、この考え方が本書のすみずみまでを方法的に統一している。本書は多くの実態調査の労力と、たくましい構想力の組合せとして出来上った傑作であり、本書の出現を心から喜ぶたい。各章を読み進めるにつれ、私は知らず知らずの内に価格理論による制度分析と、用意しゅうとうな実態調査の結果とが、どこまで同じ平面で交錯しうるのが読みとろうとして、大きな知的興奮を感じざるにはいられなかった。

〔浜田宏一〕